

キリスト道講演会(東京第8回)

## 「神の思い」と「人の思い」(二) —真に豊かな人生の道

2009年11月15日(東京 法曹会館)

奥田 昌道

天国の前味 イエスという躰き 愛の思い 己を愛することく 心の中の間 魂の糧 霊の貧しい人 神の思いと人の思い 天からの派遣社員 光と闇 見えない世界の太陽 心の中の大掃除 私もいっしょだよ へりくだる霊に宿る神 悲しみに代えて喜びの油を キリスト受難の秘儀 我々を救いあげるために 人間の本質的な姿 天への道を開いてくれた方 日本は最後の終着点 旧約における福音 幸いなるかな キリストの十字架 サンダーシング 山上の大告白 私 はナツシングだ おまえは十字架にかかって人の罪を背負え 幸いだ、私があなを慰めるから 鍵は一つ 自分で味わってください 祈り

### ●天国の前味

皆さま、よくおいでくださいました。日曜日といいますが、皆さまにはいろんな計画、あるいは催しその他がありますので、なかなかこういう会に出てくるのは大変だろうと思いきや、よくおいでくださいました。残念ながらまだ随分空席があつて、もつたいたいという思いがいたしますけれども、その分皆さまは人の分も何倍も今日は貯えをためて、また1年間がんばって欲しいと思います。

毎年、私は新宿集会という小さな集まりへ月1回参りまして、そこでお話をしております。昨年まで2年間はヒルティと一緒に読んできました。今年の2月からヨハネ福音書を2章ずつ読んでおります。そんなことで、今ここにいらつしやる皆さまも1年とはいわずにそういう集いにもまた来てくださいます、だんだんそういう世界に溶け込んでくだされば、うれしいなと思つています。

皆さん、これからとつぷりと天国に浸りきつて欲しい。わずか2時間ほどしかありませんけれども、この世の中の時間からちよつと切り離されて——これは別室です、天国行き宇宙船だと思つていただいて——天国の前味を2時間の間に味わつていただきたいと思う。

人間というのはいろんな事を成し遂げてきました。けれども、一番遅れているのは天国を知らないということです。

「いや、死んでから行くんですよ。でも、逝つた人は帰ってきてくれないからね」なんて。だから、この地上にいながら、天国とはどんなところだろうかと。

皆さん、この世の地上の生活が終れば、それで本当に終りと思つていらつしやいますか。本当に終りと思つている人は、ちよつとおかしいと思つています。必ず向こうへ行く。向こうの世界がある。それは次元が違ふんです、この肉体の次元とそういう霊の次元とは。3次元と



4次元の違いです。だから、なかなか大変なんです。なかには臨死体験などで向こうへ行つてまた戻ってくる人のお話があります。ほとんどが一致している。みんな、

「向こうは素晴らしい。戻りたくない」と言うんですよ。

「でも、あなたは地上で使命があるから、戻りなさい」

と言われて無理に戻らされる。お会いしているのは誰かというところ、キリストなんです。光輝くキリスト、愛に満ち溢れたキリスト。もうそのお方に吸い込まれて、とろけそうになつて抱かれて、

「もう帰りたくない」

とみんな駄々をこねて、いやいや帰ってきている。そういう世界がある。そういう世界を、肉体を持ったままで現れてきて、一生懸命で話してくださったのがイエス・キリストという方なんですよ。

### ●イエスという躰

新約聖書の福音書にイエス・キリストのことが書かれています。弟子どもが書いたけれども。あれを読みますと、なんとキリストは苦勞しておられるなと思う。誰も知らない事を自分だけが知っているわけです。

「天からくだつてきた者のほか誰も知らない」

と言っておられるでしょ。一生懸命で「ああだよ、こうだよ」と、いろんなあの手この手を使って、天のことをお話しなさつても、ほとんど受け入れられない。拒絶反応です。しかも、その拒絶反応を示しているのが、神さまの選びたもうたイスラエル民族なんです。だから、余計しまつがわるい。「これこそわが民」と思つて神さまが選び、父祖アブラハムに始まつてずっとイスラエル民族以外の諸民族に対して、

「神の道<sup>あかし</sup>を証するため、示すために特別に選んだ」

と言われたその民族が、神さまのこゝを受けつけない。しかも、

「自分たちは神さまの教えを守っている」

と信じ込んでいる。そして、本当の神のお使いがやってきても、それを迫害して、最後は殺してしまふでしょ。これが十字架ですよ。

私は歴史を否定しません。少なくとも人間が文字をもつて記録するようになってからの歴史です。紀元前2000年から2500年くらい前からユダヤの歴史は始まっています。アブラハムで紀元前1500年だとか——あるいはもうちよつと先かもしれませんが——その脈々たる歴史があります。そして、イエスという方が現れてきた。イエスという方が現れて、十字架で亡くなられて——亡くなりつぱなしではありません。今も素晴らしい姿で輝いてお

られます——それから2000年。都合、多くみても4000年か4000年ちよつと、そういう人類の歴史です。しかも、イエス・キリストから紀元前と紀元後を分ける。やはり、時代を画する存在だったということがそのことでもわかります。そのイエスという方が本当にこれは躓きなんですよ。

ギリシア人なんかにとっては、哲学的に考える神だったら存在しても、

「神が人の形をとつて現れた」

なんてことは全然信じない。それから、

「神の子が十字架に付けられて殺される」

なんて、そんなバカなことはないというのがユダヤ人です。だから、知恵や知識をもつてしても神を認識できないし体感できない。今度は人間的な思いでみますと、全部躓いてしまつて、最後はキリストを殺してしまうわけです。これは人間のひとつの姿を表していると思います。

「ギリシア人は知恵を求め、ユダヤ人はを徴を求める。どつちもだめだ」

ということですよ。

### ●愛の思い

イエス・キリストという方が福音書の中でいろんなことを話したり、み業わざをなさつていまして、すけれども、それと人々との反応の仕方があまりにもかけ離れていて、本当に苦労なさつていきます。キリストの身に自分の身を置いて、自分がキリストになったつもりで——俳優さんというのは正にそうですね、自分と別人格になるんです——皆さんが本当にキリストになつたつもりで福音書をずっとご覧になると、お気の毒にも一生懸命に自分のことを話しおられても、受けつけない。それが実は人間の姿そのものなんです。

そんなこともありまして、私が今日ここに掲げました題名は、『「神の思い」と「人の思い」』です。いい題だなあと改めて、私は自分で悦に入っている。いかに神さまが思っておられる御思みいと人の思いは違っているか。しかも人間に対する思いは愛そのものなんです。

「永遠の生命を与えたい。本当に人間として素晴らしく輝いてほしい。しかも、この地上が終つたら向こうでもっと素晴らしく輝いてほしい」

という、愛の思いに尽きる。ただし、ひん曲がった、ねじ曲がった心でおれば、向こうへは行けません、向こうは清らかな輝く世界ですから。真つ直ぐな思いになつて向こうへ行つてほしいと思つて、いろんなことを語っておられる。かつてはモーセを通して律法というものが与えられた。

「モーセを通して律法が与えられたけれども、めぐみ恩恵とまこと真理はイエス・キリストによつてもたらされた」



と、ヨハネ伝の冒頭に出てきます。光として来てくださった。

「はじめ太初に言があった」

と言つてますけれども、これは霊なる言、れいげん霊言です。根源的なお方が神と共にいらつしやつた。その方が時至つて、肉体をとつて現れてくださった。まだ誰も神を見た者はいない。ただ父の懐にいます神だけが——つまり、イエスです——神を現したのである。そういうことがヨハネ伝の第1章に出てきますでしょ。1章の途中からは、イエスがいろいろな人々に出会う物語という形で展開していきます。だから、この聖書は、特に新約聖書というのは興味がない。本当に何度読んでも、新しい読み方ができますし、一遍読んで、「読みました」なんて、全然そうではない。自分の中が変わっていくにつれて、読み方にまた深みが出てくるんです。

●「己を愛するべし」と

たとえは、

「律法の中で何が一番大事ですか？」

とパリサイ人がイエスに聞いてきた。そのときに、申命記とレビ記の両方から引用して、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、汝の主なる神を愛せよ。それ

から、己を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい。この二つだ」

と言われた。つまり、神への絶対的な献げ、愛。それから、人々に対する愛。それも

「己を愛するように人々を、隣人を愛しなさい」

と言われました。私は、「己を愛する」というのは、

「人間は全部、自分がかわいいから、どんな人間だつて自分をかわいく思つて大事にする、そのように隣人を愛する」

と、そう受けとつてきた。ところが、違うんですね。違うというかもつと深い。本当の意味で「己を愛する」ということは人間はできない。自分が嫌なんです。自己嫌悪というのがあるでしょ。自分が嫌なんですよ。

「私は自分をほめてあげたい」

と言えたらいいんですけども。ところが、それはほめてあげたい自分もおるでしょうけれども、けなしたい自分、嫌な自分、捨ててしまいたい自分、「もういやっ!」というのが必ずあるはずですよ。そして、思い詰めると悲劇が起りますけれども。

そのように、人間というのは本当の意味で己を愛することができないんだと思います。というのは、嫌なものも、嫌いなところも、マイナスもプラスも全部ひっくりかえして、全存在そのものをそっくり受け入れて、それを愛するということ、これは人間はできないですよ。でなかつたら、自殺ということにならない。もちろん、自殺というのは、望みを失つて、生きがいも



ない、嫌だという、いろんなマイナス要因が爆発して、自殺ということになるんでしょうけれども。基本的には己を本当に愛することができないという、そこから来ていると思う。自分で自分の生命を絶つんですから。

「己を愛するごとく隣人を愛せよ」

というけれども、

「あなた方は本当に己を愛せますか。どんな嫌な自分でも愛せますか?」

ということです。

「いいえ、この嫌なのは親父おやじからきている。自分には汚れた血が流れているんだ」

とか、そういう形で自分を呪いますね。でも、そんなことに関わりなく、とことんすみずみまで己を愛しぬくということはできない。もし、できれば、

「そのような愛で隣人を愛しなさい」

と。でも、それはできませんわ。そうすると、

「こんな吐き捨てたい自分でも、愛してくれているお方がいらつしやる。無条件で愛してくれているお方がいらつしやる。無条件で受けいれてくれている方がいらつしやる」

ということに目覚めて初めて、

「ああそうだ。人が捨てても、自分が捨てても、そのお方の愛が私を包んでいる」

と。「己を愛する」ということはそこで初めてできる。その愛があつて初めて、隣人にも本当に無条件に心を開くことができる。ということは、結局は、

「神さまの無条件な愛に目覚めなさい」

ということなんです。

「どんなあなただつて、神さまはあなたを無条件に受け入れていらつしやる。その無条件の愛を受けとつて、それであなた自身を本当に愛してごらん。そうしたら、

隣人も愛せる。もちろん、源みなもとである神さまも愛するようになるよ」

と。そうすると、三つがグルグルグルグル回つて、そういう霊というのは非常に高いところに引き上げられていくんですね。ところが、「己いやが嫌だ、嫌きらいだ」と暗い方へ向いていますと、暗い方へ引きずりこまれていきます。

### ●心の中の闇

闇というのは何でしょうか。今日は素晴らしいお天気ですね。私はホテルからずっと歩いてきた。歩行者天国になっていて、たくさんランナーが走つてたり、競輪の人が走つていたり。素晴らしいお天気です。

これは太陽の光を燦々さんさんと浴びているからです。太陽の光がなくなったら、どうなりますか。



真つ暗でしょ。なにも光がなくなるのではなくて、地球が背を向けているから、光が届かないだけです。地球はグルグル太陽の周りを回りながら、また自転をくりかえしている。太陽に背を向けている間が夜で、太陽に向かっている間は昼です。だから、夜という、闇というものには積極的に存在しない。光がなくなっている状態が闇なんです。我々は光に包まれている。ところが、光をシャットアウトして閉ざしますと、それが闇になる。そういうことを皆さんは考えられたことはありませんか。

神さまは光であられる。

「我は世の光なり」

という。太陽の光が燦々と降り注いでいる。これが神さまの姿です。神さまの愛の光が燦々と降り注いでいる。それに対して心を閉じて、真つ暗な中に閉じこもっているのが闇です。つまり、光が届かない状態が闇であつて、神さまが積極的に闇をお造りになつていくわけではない。地球がクルツと背を向けてますと、それは闇になり、また戻つてくると、光が射す。みんな光の子としてつくられているはずなのに、それを自分で心の窓を閉じている。これが人間の闇の姿です。子どもさんは実に生き生きしている。赤ちゃんは闇を知らないから。ところが、物心ものしころがついて、すべてのことに懐疑的になつて、自分自身も嫌になつて、それだんだん、心の扉を閉ざして閉じこもつてしまう。自分で闇の中に閉じこもる。心の扉を開いたら、光がフワーツと入ってくる。非常に単純な簡単なことなんです。

でも、この一番簡単な、一番単純な、一番根源的なことを学校では教えない。

「宗教教育をしたらいけません」

と、60年間やってきたでしょ。経済がすべてのような考え方が支配していた。これが自分で光を閉ざした状態、闇です。それをもう一度、扉を開いて、光を入れないといけない。闇というものが積極的にあるのではない。光が届かない状態をつくっている、それが闇なんです。背を向けて。まあ、人間は夜がないと、昼ばかりだとやりきれませんから、それはそれで結構なんですけれども、心の中に闇をつくっていたのでは、これは申し訳ないですね。非常に単純なことです。

### ●魂の糧

本題に入らないといけません。たくさん資料を皆さんにお配りしてあります。

「神の思いと人の思い——真に豊かな人生の道」

と題しました。聖書の言葉をたくさん切り抜いて貼り付けてある。これはまだほんの一部です。本当ならもつとになります。こういうお話は連続講義で、2、3日間くらいやれば、皆さんは本当に堪能してくださるんですけれども、それをほんの一かけらだけこの短い時間でちよつと味わっていただく。それだけなんです。プリントを追いながら、ところどころ感



想を申し上げたいと思います。

まず、イザヤ書55章からとりました。イザヤ書は40章〜55章が、第二イザヤという無名の預言者による預言の書とされています。バビロン捕囚末期の紀元前540年頃のものと言われています。しかし、読んでいまして、全然、違和感を感じない。不思議なんです。あのイスラエルという、やや特殊な国——今でも戦争ばかりやってますね、あの地方はとんでもないことをやっている国々です——その一角に預言者たちが現れて、神の言葉を伝えた。イザヤという預言者の言葉が収録されている。その中で55章の一番始めのところから、

「**渴きを覚えて**いる者は皆、**水の**ところに来るがよい。  
**銀を持たない者も**来るがよい。

**穀物を求めて、食べよ。**

**来て、銀を払うことなく穀物を求め**

**価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。**

と。「大事なものを本当に求めなさい」ということを言っていました、2節のところに、

**なぜ、糧かてにならぬもののために銀はかを量はかって払い**

**飢えを満たさぬもののために労するのか。」**

神さまというものを知らない我々の経済生活は正にそれなんです。「糧かてにならぬもののために」の「糧」というのは心の糧、魂の糧です。「永遠の生命」です。つまり、この世限りの生命ではない。この世の先の永遠の生命です。いや実はこの永遠の生命は今も貫いている。我々は3次元の世界の人間ですけども、その中に——4次元か5次元か何か知りませんが——天の次元の生命が宿ってきた時に本当に人は生きる。それを知らなかったら、まだ半分しか生きていない。この地上の間にその永遠の生命を味わっていると、向こうへ往くときにはスツと往ける。ところが、この地上で地上のことばかりに汲々としていると、向こうへ往くときに戸惑いを感じるわけです、

「こんな世界は、私は知らなかった。こんなものは私の辞書になかった」

と。どんな学者であつても人間は全部平等につくられています。学問のあるなし、お金のあ  
るなし、そんなことは関係ない。この霊の世界、生命の世界はそんなことに関わりなしです。

### ● 霊の貧しい人

それは新たに生まれなければしょうがない。

「**人、新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず**」

と、あの学者のニコデモにキリストが仰った。非常に平等ですよ。この世のことはいろんな才能が不平等です。金持ちはうんと金持ちになるし、速い人はもの凄く速く走るし。いろん



な学問の頭のいい人はもの凄くいいしね。でも、本当に平等なのは、人はみな魂を持った存在だということ。霊のひと、これはみんな平等なんです。どんな人が向こうの世界で輝くかということ、

「恵福さいわいなるかな、霊の貧しいひと」

という。「霊の貧しい」というのは、さいわい、さもないのではない。

「私のものはこれっぽっちもありません。みなあなたからいただきます」

というふうに、神さまの前に本当にへりくだっている、己を何ものともしない、そういう人。キリストがそうなんです。

「私は何ものでもない」

とキリストはよく仰っているでしょ。

「神さまがしゃべれと言うことをただ伝えているだけだ」

と。それが人の気に入らないものだから迫害されたわけです。あまりにも次元が高すぎたから、それで人々は迫害した。最後は十字架につけて殺した。でも、キリストが言っておられたことは本当の本当の世界のことを伝えられたんです。これが「神の思い」ですよ。

「人の思い」は自分のキャパシティ (capacity: 収容能力、許容量) の中に入ってくるものしか受け入れない。向こうの見えない世界のことを受け入れない。特に科学の人はそうですね。でも、閉ざされた世界がすべてであるという証明はどこにもないわけです。

幸いなことに、臨死体験とか、そういうもので書物が出てきますと、非常にそれを破つてくれると思います。臨死体験された方の証言というものはほとんど共通性があります。ああいう本は非常にいいと思いますよ、我々の偏見を破ってくれるから。その証言していることが聖書と、あるいはキリストが言っておられることとかなり一致している面があるんです。あのスウェーデンボルク (1688～1772) 生きながら霊界を見て来たと言う霊的体験に基づく大量の著述で知られる) だとか何だとかあまり行き過ぎたところは、皆さんは警戒なさった方がいいけれども。そうでない素朴な人が臨死体験して語っていることはほとんど一致しているようです。まあそんなことですか、我々は向こうの世界を覗のぞけないんだからしょうがない。でも、そんな世界を覗かないでも、

「キリストが語られたことは本当だ」

というふうに心から受け入れる人はもつと幸いなんです。

「見ずして信ずるものは幸いなり」

とキリストは言われた。でも、それは無茶苦茶なことを無理やり信ずるのではない。

「それに違いない」

という納得の世界です。本当にキリストの世界は納得の世界です。私みたいな法律学をやつて理屈っぽいことをやっている人間が、



「キリストの言われることは本当にその通り違いありません」と完璧に降参してしまうんですから、やはり、キリストというのは素晴らしい方です。

### ●神の思いと人の思い

イザヤ書55章に戻ります。

「<sup>2</sup>……わたしに聞き従えば良いものを食べることができ。あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。……<sup>6</sup>主を尋ね求めよ、見いだしようとき。呼び求めよ、近くなりますうちに。<sup>7</sup>神に逆らう者はその道を離れ、悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば豊かに赦してください。わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なりと主は言われる。<sup>8</sup>天が地を高く超えているように、わたしの道は、あなたたちの道を、わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている。」(イザヤ55・1～9)

「神の思いと人の思い」という題をつけたのはここから来ています。こうじゃないといけませんよ、人間と同じようなことを神さまが考えているのなら、大したものじゃない。

だいたい、日本に祀<sup>まつ</sup>られている神様というのはみんな——天神様は菅原道真<sup>すがわらのみちざね</sup>でしよ、私よりはずつと賢い方だと思えます——でも結局、人間なんです。八幡太郎義家<sup>はちまんたろうよしえ</sup>、八幡様は武将です。みんな人間のちよつと優れた者が神さまと崇め<sup>あが</sup>られているだけのこと。みなそれは素晴らしい人でしょうけれども、結局、人の延長なんです。レベルが似てるようなものだから、余計みんなお参りするわけです。ところが、桁違いな方は敬遠してしまう。キャパシティ、受容能力がないわけです。似た者なら受け入れられる。まあ、私はそういうことだと思つて、決して日本にある神社や仏閣を否定しません。でも、その存在の次元が違う。人間の延長としての神様と、本当に根源的などころから降<sup>くだ</sup>ってきたようなお方と一緒にされては困る。プロとアマとは違つと、そう言つておきたいと思えます。それは神さまの次元のプロとアマですよ。本当のプロはキリストですよ、自分から来てないもの。

「おまえ、行つてこい！」

と言われて、派遣されて現れてきた派遣社員ですよ、たった一人のね。

### ●天からの派遣社員

だから、ヨハネ伝なんかを読んでごらん下さい。

「私が語っていることは私ではない。語れと仰つたことをそのまま言っているだけだ。自分では何も教えてない。何も持つてない。文句があるなら、天の神さまに文句言つてちょうだい」



と、キリストは言っておられるんですよね。全然、威張っていない。

「自分は何ものでもない」

と言っているだけです。本当の派遣社員です、天からの。己がないんだから。しかも、あれほど豊かなお方はいらつしやらない。地上での伝道はわずか3年間です。しかも、最期は残酷な十字架です。その刑に処せられて、それから変貌して現れてきたでしょ。そして今に至るまでいろいろな所にキリストは現れておられます。これはやはり凄いお方だと思います。お釈迦さんもそれなりに凄い方だと、私は尊敬します。でも、それは別な道ですから。お釈迦さんはお釈迦さんの道があつて現れてこられた。キリストはキリストで現れてこられた。しかも、キリストという方は、

「私は自分から来てない。遣わされてやって来た」

と仰った。「私をお遣わしになった父なる神」と、いつもそれでしょ。我々には、「父なる神」と言われても、全然見当がつかない。それを、

「私を見た者は父を見た。私の中に父が現れていらつしやる」

と言われた。「では、あなたは何ものか?」と、

「何ものでもない。自分はからつぽだ」

と。「からつぽ」というのは簡単になれない。全部、自我がありますから、「私は」というのが。ところが、キリストは、

「私は何ものでもない」

と。本当にナッシング、本当に真空です。真空の中に神さまが100%宿ってます。99%からつぽにして、1%自分を残しているのが人間ではないかと思えます、修行している人は。やはり、己があると思う。ところが、あのキリストというお方は本当に真空です。神さまが100%に宿っているから、いろんな御業みわざが起こる。

「私の業ではない。せよと仰ることをしている。しゃべれと仰ることを伝えて  
いるだけだ」

と。それであんな凄い事が起こっている。人間は理解できないから、寄つてたかつてやつつけてしまった。十字架につけて殺した。でも、現れてきたでしょ。死につばなしではありませんよね、キリストという方は。もし、キリストが死につばなしでは、神も仏もないと断言します。故あつて地上に現れ、そして故あつて人々の罪、咎とが、悩み、病い、すべてを一身に背負つて、十字架で死んだ。神さまが放つておくはずなんですよ、あのように神さまと一緒に生きたひとを。

「私の思いではありません。父よ、あなたの御意みこころだけを」

と。それに貫いた。だから、

「私を見た者は父を見た」



と言えたでしょ。自分是从らっぽですから、父なる神さまが100%宿っておられる。弟子ですら、最後の晩餐のときに、

「ひとつお願いがあります。父なる神さまを見せてください。そうしたら、納得します」

と聞いたたら、

「一緒に長いこと暮らしてきたのに。まだ、わからんのか。私を見た者は父を見たのだ」

と、言われたでしょ、ヨハネ伝14章で。そのくらいに人間というのはあかんですな。見ても見えていない。そういう出来損ないとおぼしき弟子どもが生まれ変わったんですよ、ペンテコステを通つて。使徒行伝に出てますように、聖霊を受けてから変わりました。天界のキリストが現れてきて、それから弟子たちは殉教も迫害も全然、問題にしくなつた。

だから、そのキリストというお方は本当に凄いお方です。わずか3年の伝道ですよ。3年の伝道で、しかもあのユダヤの片隅の所でなさつていた。それが今、全世界に伝えられている。いろんな方にキリストは現れて、励ましたりなんかなさっている。

### ●光と闇

私は、日本の方々はものすごく心の優しい方だと思う。自然が穏やかですから、排他性もない。非常に柔軟なんです。ところが、残念ながら、このキリスト・イエスとか、キリスト教にだけはシャットアウトしているんですね、全体として。

「私たちは満ち足りています」

と言う。なんでそんなことを仰るのか、私はわからないからでしょう。今、民族なんかにこだわる時代ではない。みんな裸になつてごらん。同じ姿です。毛色やいろんなものが違うでしょうけれども、ハートは、心は人間共通だし、地球は一つでしょ。宇宙旅行してきた方には、地球は実にいとらしい存在だそうですね、青々として。他の星は真っ暗なのか知りませんが、地球だけは実に素晴らしい。その地球上の、何十億の方々か知りませんが、それがどここの民族だといって、民族間の争いをやったり、領土の争いをしたり、一生懸命に原爆を作つて、もう原爆どころじゃないもの凄いものも作つて、そしてどれだけ減らそうかなんてやっているのが人間です。なんで、本当に地球市民というレベルに來ないんだらうかと。何でなんでしょうね。

「私のところの宗教はこれだ」

と言つてしがついています。日本人は非常に柔軟性に富んでいるけれども、ことキリストのことに關しては何か心を閉ざす傾向がある。他の事については非常にオープンマインドです。ところが、ことキリストのことに關しては何かシャットアウトする。それを私は打ち



破って欲しいんです。今やそんな時代ではない。

太陽をご覧なさい。今日は燦々と光を降り注いでいますよ。闇とは何か。太陽の光をシャットアウトしている姿が闇なんです。そうでしょう。太陽は輝き続けている。それをシャットアウトしているのが闇です。人間でいいですよ、自我、己というものが邪魔をして、本当のものが入ってくるのを閉ざしている。それでは、自分の中は何かというと、光がない状態を闇といいます。扉を開けば光が入ってくる。非常に単純なことですけれども。

「ユダヤ教は嫌だ、キリスト教はいやだ。イスラム教を見ろ、あれはけしからんではないか」

と。相対的に比較したらそうかもしれないが、本当の根源のところへ帰って、そこから人間が本ものを受けとれば、それでいいのではありませんでしょうか。

だから、私は「キリスト教」という言い方は嫌いです。「宗教」という言葉もいやです。なにか自分の教義とか教理とか、そういうものにこだわって、自分の善さを際立たせるために他者を排撃していく。それが嫌なんです。キリストは全然、そんなものはない。自分からつぽですもの。自分からつぽでしょう、神さまが100%に来ているでしょう。それは愛そのものでしょ。みんなを生かして行かれた。そういう単純なところへ帰ってこないとおかしいですよ。

その単純なところを今日、私は皆さんにお話ししようと思って、皆さんがここへ聞こうとして来てくださった。皆さんはご自分の意志でおいでになったと思いますけれども、やはりそういうふうにお考えようと思われたご自分の導きがあつたのではないのでしょうか。

そうなんです。人間はみんな自分——「自己決定」と法律学でもさかんに言う。でも——本当に人間というのはそんな自己決定していませんよ。何かに導かれ、何かに促されて、それで「ああ、そうしようか」と思って来たら、素晴らしいものに出会っていた。

「今日は宝ものに出会って来たよ」

「そうだろう、良かっただろう」

と、導かれたのは守護霊さんですな、皆さんの。それが導いておられると私は思います。

### ●見えない世界の太陽

今日は実にいい天気、本当に太陽が輝いてましょ。太陽は万物の命の源でしょ。その太陽によって皆さんは命づけられているわけですよ。ものごとの認識だって、太陽の光で初めて本物のものが見える。

見えない世界の太陽がキリストであり、そこから発せられている光線、これが生命の光線と言つていいでしょう。太陽の光を浴びないと、自然的生命の我々は死んでしまいます。同じように、見えない世界の見えない次元の太陽であるそのお方からの生命をいただかなかつたら、我々は死ぬんです。みんな生きていような顔しているけれども、それは地上の生命



です。地上の生命はだいたい、今は120歳ですか。まだ120歳までは行ってませんね、最近。旧約聖書なんか見たら、

「アダムは930歳まで生きた」(創世記5:5)

なんて書いてあるが、そんなのはどうでもいい。だいたい、今は120歳が限度ではないでしょうか。そこから先はどこへ行くんでしょうか？

「私は無神論だ。どこへも行かない」

と、そんなのは理屈です。皆さんは「慰霊祭」をなさったり、「黙祷」と言つて、黙祷したりする。次に行く場所がなかったとしたら、全部、偽りではないですか、そんなものは。そうですね。人間というのは、地上の生命はせいぜい120年。けれども、120年の間に永遠の世界と縁結びをなさいと。早い人は70歳かもしれない。早い人はもつと若いかもしれない。これは法学の方では、「必ずやつてくる、でもいつかはわからない」というのは「不確定期限」といつて、「何月何日」というのは「確定期限」という。皆さんは、せいぜい120歳を限度とする不確定期限の中に生きている。でも、それで終つて本当のお終いだったら、これは寂しいよね。若いときはそんなに思わないかもしれない、「私は元気だ」と思つて。ところが、だんだん年齢を重ねてきて、頭の毛がだんだん薄くかつ白くなってきますと、それは生命がだんだん薄くかつ短くなつてきている象徴だと思えますけれども、

「本当に自分は死んだあとはどこへ行くんだろうか？」

と、誰も思いませんか？ 私はやはり、思うのが人情だと思ふんですよ。無理やり「思わないでおこう」と思う、それはできませんけれども。でも、それは偽っているだけであつて、必ず人間はこの肉体を脱ぎ捨てたら、行く場所がある。それが光の世界へ行くか、闇の世界へ行くか。これなんです。どなたさまも、この地上限りで終りというのは誰もいない。人間はもともと自分で生まれてきたのではないですから。どなたさまもこの地上の世界が終つたら、次は行く場所がある。それが願わくば光の方へ行つてほしい。闇の方へ行つたら、これはあまりにも寂しくて惨めすぎます。

「光のある間に光を信じなさい」

とか、ヨハネ伝にも出てきますよ。そういう非常に単純なことなんです。ただ次元が違いますから。我々は3次元の世界にいます。ところが、別次元ですからね。別次元からの語りかけだから、これは大変なんです。

「神の思いと人の思い」という題ですけれども、神さまの思いというものは、肉体的な人間、3次元の中に生きている人間にはダイレクトには受けとれないです、残念ながら。ヨハネ福音書3章にニコデモとの会話がでてくるけれども、ニコデモのようにユダヤ人の学者で尊敬されている学者でさえ、天界のことが全然わかっていなかった。それで、キリストにやつつけられるんです。



「人、新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず」

「新たに生まれるとは何ですか。もう一回、お母さんのお腹なかに入るんですか」  
なんて、ニコデモはどきどきして言ってますね。

「あなたはユダヤ人の学者でありながら、こんな単純なことがわからないのか。肉から生まれるものは肉であり、霊から生まれるものは霊である。風は思いのままに吹いている。どこから来てどこへ行くのか誰も知らない。新しく生まれるというのはそのようなことだ」

「どうして、そのようなことがありえましょうか？」

と、そこから、ニコデモはもう本当に混乱しています。あれはなにもニコデモだけではない。我々はみなそうなんです、知らん世界ですもの。

「知らん世界をどないしてわかるのや!？」

と。知らん世界からやってきたのがイエスというお方ですよ。しかも、自分から来たのではない。

「遣つかわされてやって来た」

と言う。遣わされてやって来た人なのであって、立候補して来てない。「行け」と言われて、「はい」と言ってきた。そしたら、みんなが歓迎してくれるかと思うと、みんなに最後はボコボコにされた。自分に都合のよいことをやってくれる間はチャホヤしています。ところが、都合がわるくなると、みんなボコボコにされる。それを全部、自分が背負いこんだ。これがイエス・キリストの生涯ですよ。

### ●心の中の大掃除

イザヤ書55章に戻ります。

「<sup>6</sup>主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くいますうちに。<sup>7</sup>神に逆らう者はその道を離れ、悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば豊かに赦してください。わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なると主は言われる。<sup>8</sup>天が地を高く超えているように、わたしの道はあなたたちの道を、わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている。<sup>9</sup>雨も雪も、ひとたび天から降ればむなく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。<sup>10</sup>そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。」(イザヤ55:6~11)



この8節、9節ですね。

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道と異なる」

これが今日の題の「神の思いと人の思い」という、それをここからとったわけです。

「天が地を高く超えているようにそのくらいに神の御思いと人の思いとはかけ離れている」

ということですよ。

「では、どうやって認識できるの?」

と、哲学者は一生懸命に頭脳を使って研究したでしょうけれども、これはイエスがニコデモとの対話で仰った、

「人新たに生まれずば、神の国を見ることができない」

と。新たに生まれるとは、

「肉から生まれたものは肉だ。霊から生まれるものは霊だ」

と。では、どうやって霊から生まれるのか。

「それを私がひっさげて来たんだよ」

というのがキリストでしょ。キリストの唯一の使命です。天の世界、永遠の生命の世界をこの地上にもたらしてくれた。みんなが本当の意味の永遠の生命、神の子となるために、それにはまず大掃除をしなければいけない。なにも環境問題のことを仰っていない。人間自身の心の中の大掃除です。もう先祖代々受け継いできた自我のかたまり、我のかたまり。己を高くして神を認めない。己中心、そういった今までに積み重ねてきた人間の業——我々の言葉では「業」です——これをぶっこわして、本当に神さまの生命は宿らなければならぬ。そのためにキリストを待っていたのは十字架だったでしょ。ええ、何たることでしょう。あんなに素直な方はいらつしやいませんよ。我々の知らん神さまを「父」と呼んだ。

「父よ、あなたの御意を天において成るように地にも成らせてください。私をお使ってください」

と、自分を献げているんです。

「私の語っていることは私の思いで言っているのではない。語れと言ったことを、為よと仰ったことをその通りしている」

と言われた。

「では、あなたはロボットか?」

「はい、ロボットです」

と、平然と仰っていますね。人間はだいたい、

「私もちよつとはええところがあるんやで。ちよつとは認めてよ」

と言いたいんです、人間は。ところがキリストは、

「私は何ものでもない」

と言う。ナツシング、からっぽだと。本当にからっぽなんです。そうしたら、100%に神さまが宿っておられる。

●私もいつしよだよ

多くの人が洗礼のヨハネによってヨルダン川でバプテスマを受けた。

「そのうちに神の審判がある。大変なことになるぞ。さあ悔い改めろ」

と、やりました。神の怒りを、審判を宣言した。すると皆は恐いものだから、ぞくぞくとバプテスマを受けた。そこにヒヨコヒヨコやって来た人がある。誰かという、イエスなんです。ヨハネは、

「いえ、あなたは違う。悔い改めのバプテスマを受けることはない」

「いや、私も受けさせてほしい」

と、イエスは平然とヨハネから水のバプテスマを受けたでしょ。水からあがったら、霊界の天が開けて聖霊が鳩のごとく、あるいは滝のごとく、降ってきた。

「これは私の心にかなうもの」

と、そういう御声があったという。洗礼を受けて、天が開けたのはイエスの場合だけなんです。どこに神さまは悦んだかという、

「私も受けさせてほしい」

と、己を何ものともしていかない。「こいつらは罪びとや。私は違う」なんて、そんなのではないですよ、そこらの教祖みたいだね。そうじゃなくて、「私もいつしよだよ」と言つて、ヨハネに身をまかせて、そして水からあがって祈っておられたら、天が開けて聖霊が鳩のごとく降ってきた。

「これぞわが心にかなうもの」

という声が天から聞こえた。そしたら、すぐ伝道したかという、そうではない。「荒野の試み」が待っていました。四十日四十夜、あそこで散々いろんなことを体験なされた。それが「三つの試み」です。「四十日四十夜」は長いですよ。私たちは子どもの頃の四十日の夏休みはうれしかったですね、もう終りの方は飽き飽きするほど長かった。その四十日四十夜をたったひとり荒野でサタンと闘った。それが終ってから伝道が始まったんです。これは凄いですよ。

インドにサンダーシングという人がいました。彼は1904年に15歳で改心する。インドの人ですから、自分の宗教に逆らうということ、毒を盛られて死にかかるけれども、それを救われて、伝道にたずさわった。1909年頃かな、日本にも来られたそうです。最後は



チベットで殉教したという。この人は本当に不思議な体験をしている。何度かキリストにお目にかかっている。岩の上に座禅をくんで何時間も瞑想していると、パッと天界が開けて、キリストと問答したりとか。そして、この人は自分で何度か四十日四十夜の断食をやっている。凄いですよ、このサンダーシングというのは。だいたい、聖書学者は、

「四十日四十夜なんて、そんなバカなことはない。あれは四十という語呂合わせだろう」

なんてことを註解に書いてあったりする。何で信じないんですか。サンダーシングですら、四十日四十夜の断食を3回くらいやっているんです。だから、もう少し素直にスツと受け入れた方がいい。学者というのは賢いようで馬鹿なんです。いやいや、法律学者はそうではありません(笑)——だいたい、絶対界の世界でしょ。絶対界の次元というのは絶対界の方しか解らないんですよ。我々、相對界の人間は素直に「はい。はい」と受けとる。これしかない。批判したり批評したりなんて、そんなおこがましいことはできたものではない、と私は思っている。

### ●へりくだる靈に宿る神

またプリントに戻って、イザヤ書の57章にいきましょう。見出しは全部、私が付けました。イザヤ57章15節、「へりくだる靈に宿る神」という。

「<sup>15</sup>高く、あがめられて、永遠にいまし、その名を聖と唱えられる方がこう言われる。

これは神さまのことです。

わたしは、高く、聖なる所に住み、打ち砕かれて、へりくだる靈の人と共にあり

へりくだる靈の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命を得させる。」(イザ

ヤ57・15)

もう旧約聖書でこうなんですよ。新約聖書にきたら、もつと共通なものがあります。それはこの世で驕り高ぶっている者、自分を何ものかと思っている者——つまり傲慢というかな——そういうものは全部、シャットアウト。心砕けた者、うちひしがれた者——簡単にいうとペシヤンコです——そういう者に神さまは宿る。これは素晴らしいと思います。この世の栄華を極めるような者は、

「ちよつと待ちなさい——」

と言われる。でも、この世で泣いている人、悲しんでいる人、子どもを失つてどうにも立ち直れない人、そういう人のところへ神さまは近寄ってきて、

「一緒に生きようよ。まだ死ぬのは早い。自殺してはあかん。一緒に生きようよ」



と寄ってきて、生かしてください。砕けたる霊に——傲慢の反対は「砕けたる霊」という——うちひしがれたる魂に宿ってください。だから、肉体がボコボコにされるのも、いうならば、肉体がボコボコにされることを通して心が砕かれる。そのためなんです。始めっから心が砕かれている人は、肉体をボコボコにされる必要はない。

イエスという方はもう始めっから、不思議なことに全部、神さまに献げっぱなしですよ。

「私は何ものでもない」

と言っているでしょ。己をサムシング(何者か)にしていない。そういう方に神さまが宿ったわけです。あのヨルダン川で天が開けて、聖霊が鳩のごとく降<sup>くだ</sup>ってきた。さっきの荒野の試みがあつて、それから伝道に出かけられた。それは不思議な業が出てくるのは当然のことです。

このイザヤ書57章は、第三イザヤ書の中のものですが、56章、66章が第三イザヤ書と呼ばれており、紀元前587年から538年にわたるバビロン捕囚から帰還した後、かなりの時を経て、書かれたものだとされています。この57章15節は、第三イザヤの預言の言葉です。

「<sup>15</sup>高く、あがめられて、永遠にいまし、その名を聖と唱えられる方がこう言われる。

至高なる神がこう言っておられる。

わたしは、高く、聖なる所に住み、打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり

へりくだる霊の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命を得させる。」(イザヤ57・15)

と。これは肉体的にボコボコにされている者、それから精神的に目茶苦茶に叩きのめされている人、いろんな両面どちらでもよろしいと思います。要するに、もう自分の中に光を見ることができないくらいに、あるいは肉体的に、あるいは精神的に打ちのめされているような、そういう人に対して、

「そういう人と一緒に私はいらぬよ」

と言われる。いと高きところにいる神さまが実は一番どん底に降<sup>くだ</sup>ってくる。

キリストがああヨルダン川で水のバプテスマを受けた。ヨルダン川は世界中で一番低い所に流れている川だそうです。一番低い川に身を沈めて、一番どん底に身を置いた。そして上がってきた。だから、降<sup>くだ</sup>ってきてくださる神なんです。

「おまえは天に昇つてこい。そしたら、そこで会ってあげよう」

と言う神さまはだめです。向<sup>お</sup>こうから降りてきてくれて抱きかかえてくださる。

あの「善きサマリア人」<sup>びと</sup>の譬<sup>たと</sup>話<sup>えはなし</sup>があります。強盗に襲われてボコボコにされて、へたつて傷ついていた。そこへ——お坊さんたちはみな遠く離れて通つて行つた——サマリア人だ



けが近寄ってきて懇ろに介抱したというサマリア人の話がある。あのようになんて近寄ってきてくれる。高いところの神さまがくだつてきて、一緒にいてくれる。これが神さまの姿なんです。しかも、どんな人のところに来るかというところ、ボコボコにされている者になんて。なにも肉体のボコボコがいいのではない。魂が、

「あなた(神さま)しかありませんわ、やはり」

と。その意味では、いろんな不幸な出来事は避けたいけれども、見方によつては恵みなんです。そういうことに出会わなかったら、人間というのはなかなか本ものを求める気持ちにはならない。己というものがありませんから。そうでしょ。

「私は何でもできる。やれば、何でもできる」

と、自信満々の人は一番、天国に遠い。落第ばかりしている人、それで自己嫌悪に陥って自殺してはいけません。自己嫌悪になったときに、

「本当の世界をあなたにあげる。そのためにあなたはボコボコにされてしまったんだよ。そんな、ボコボコにされた者に神さまは降ってくる」

と、旧約に既に書いてあるやんか、そう言っているやんか——つい関西弁が出てきてしまいますね(笑)——そうなんですよ。だから、僕が訳したら、

「ボコボコにされたる者、汝はさいわいなるかな」

と、こういうふうに訳しますね。そういう関西弁聖書というのを作りましたよかね(笑)。

「さいわいなるかな、ボコボコにされたる者。おまえはしあわせなやつちゃな」

なんてね。

### ●悲しみに代えて喜びの油を

その次はイザヤ書61章です。「悲しみに代えて喜びの油を」という。これはキリストはルカ伝で引いておられます。ルカ伝で、伝道を始められた一番先にここを引かれた。これは「第三イザヤ」といまして——イザヤ書は三つから成り立っていて、三つ目の部分です——時代的にもバビロン捕囚から解放された後のイザヤなんです。

「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わ

して、貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、

捕らわれ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために。」(イ

ザヤ61:1)

と。これをルカ伝でキリストは引いておられますが、これはキリスト預言です。キリストはここを引いて、どう仰ったか。

「あなたが耳にしたこの日にこの御言は成就した」

と言われた。つまり、



「イザヤ書でこのように言われていることは実は私のことを語っている。これを聞かれたあなた方はさいわいだ。これはもう成就したんだ」

と言われた。ところが、あのルカ伝を読んですと不思議なことに、そのあと事態が急変して、キリストが追い出されてしまうようなことが書いてある。あそこはなぜなのかわからないんです。でもとにかく、キリストはこれを引かれた。

「主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして貧しい人に

これは真実、貧しい人でもいいし、心の貧しい人でもいい。とにかく、自分によりどころを持たない人です。そういう人にこそ、

良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み、捕らわれ人には自由を、つなげられている人には解放を告知させるために。」

肉体的な捕らわれとか、そういったものもあるかもしれませんが、もつと本当は、心の、霊の捕らわれから解放する。霊の扉、心の扉が開かれたときに光が入ってくる。それを固く閉ざしていると、向こうから入れない。カーテンを閉めたら光が入らないでしょ。カーテンを開けたら光がサーツと入ってくる。我々も心の扉を、胸の扉を開けさえすれば、サーツと入ってくる。閉ざしているのが地獄のすがたでしょ、光がこないものだから。光はあるんだけれども、閉ざしているんですね。闇とは何か。光が届かないすがたでしょ。光を閉ざした相が闇なのであって、積極的に闇というものは存在しない。光がない状態が闇なんです。ところが、ヨハネ伝を読みますと、

「光が来たのに、人間はその行いが悪いために光を嫌って闇を好んだ」

と書いてある。なにかこつそりと悪いことをする人間は闇が好きなんです。闇の中でこつそりなにか悪いことをする。

「ダイヤルQ2」というあの裁判を第三小法廷で私はやったんです。突然、10万円の請求がNTTから来たので、親父さんがびっくりした。何かと調べてみたら、「ダイヤルQ2」の番組を子どもがこつそり親に隠れて夜中に聞いている。どんどんどんどん値段が上がっていく。アダルト番組みたいな。そういうのがたくさん来ましたよ。それで、NTTはほとんど負けました。いや、負けました(笑)。それで三か月くらいで向こうは改善されたんですよ。第三小法廷がほとんど引き受けたんです。

なんだか、悪いことをするのは、明るいのが嫌いやなんです。暗いところではか悪いことができな。だいたい、光を閉ざしてその中で何かをやる。だから、闇というのは光が届かない状態です。自分自身を省みて、光が届いていますか、光を閉ざしていませんか。心をオープンマインドに、心の扉を開けば、サーツと光が入ってくる。非常に単純ですよ、真理というもの。要するに、神さまはそういう心の砕けた人、不幸に泣いている人、そのところへ来てくださるといふことですね。



「<sup>2</sup>主が恵みをお与えになる年、わたしたちの神が報復される日を告知して、嘆いている人々を慰め、<sup>3</sup>シオンのゆえに嘆いている人々に、灰に代えて <sup>かんむり</sup>冠をかぶらせ、嘆きに代えて喜びの香油を、暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。」

「灰」は悲しみの象徴、「冠」は栄光ですね。「嘆き」の反対は「喜びの香油」。暗い心に代えて、明るい心になって、明るい心は神を賛美するという。

彼らは主が輝きを現すために植えられた正義の櫟の木と呼ばれる。」(イザヤ

61:2~3)

これはイスラエル民族に対して語られているけれども、イスラエル民族は実験台として選ばれただけなんです。しかも、イスラエル民族は素晴らしいから選ばれたのではない。頑<sup>かたく</sup>なで本当にどうしようもないやつなんです。旧約聖書にそう書いてある。

「どうしようもないやつを取って選ばれた」

と書いてある。あんなどうしようもないやつが救われるのなら、他の民族はみんな救われると。ところが、イスラエルはそう思わなかった。

「自分たちは神の選民だ。他の民族とは違う」

と、他の民族を「異邦人」と言って軽蔑したでしょ。それで、キリストは、「そうじゃない」と言った。サマリアの人たちというのはユダヤ人から除け者にされた。異民族と混血したら、純血を失ったと言って排除された。ところが、福音書をご覧なさい。ほめられているのはみんなサマリア人ですよ、「善きサマリア人」の譬<sup>たと</sup>えとか。

「十人の癩病人が癒されたが、神さまを讃えて途中で帰ってきたのはたった一

人のサマリア人だった」

という。ことごとくサマリア人です。そういうのはとても楽しい。出自<sup>しゅつじ</sup>、民族の何かではなくて、心の姿が本当に神さまの前に平伏しているような碎けの魂、これを神は喜び給うということです。

### ●キリスト受難の秘儀

次の53章は凄い所です。私は、「キリスト受難の秘儀」というタイトルを付けました。これは誰のことを言っているかわからない。預言者もわからないで、これを預言させられている。キリストのことを言っているようでもあり、そうでないようでもあるという。わからないんですよ。でも、イエスという方はこれを自分についての預言として受けとられた。そして、その通りに歩まれた。実に不思議です。ある人のことを語っている。

「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるうか。<sup>2</sup>乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のようにこの



人は主の前に育った。

不思議な人が現れたというんです。ところが、その人は、

見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない。<sup>3</sup>彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

ところが、

<sup>4</sup>彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいるのだと。

これは正に十字架の姿を表しているようですよ。<sup>5</sup>節にいくともっと凄い。キリストは十字架の上で槍で貫かれましたよね。

<sup>5</sup>彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎<sup>とが</sup>のためであった。

これは今の罪刑法定主義でみたら、全然成り立たないですよ。人の罪を背負うなんて、替え玉はあかんですわ。親分の代わりに自分が時々自首して、「あつしがやりました」と言っても、あかんですよね。ところが、ここで語られていることは、人の罪、人間の諸々の罪をこの人は身代わりに背負っている。ところが、人はそれに気づかない。

「あれは神に叩かれているんだ。神から刑罰を受けているんだ。ざまをしろ」とまでは書いてないけれども、そういう雰囲気ですよ。

わたしたちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだと。<sup>6</sup>彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのはわたしたちの咎<sup>とが</sup>のためであった彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和が与えられ、

平安ですね、神さまとの間の平安が与えられ、

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。<sup>6</sup>わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かつて行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。<sup>7</sup>苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった。<sup>8</sup>捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか。わたしの民の背きのゆえに、これはイスラエルですね。

彼が神の手にかかり、命ある者の地から断たれたことを。<sup>9</sup>彼は不法を働かずその口に偽りもなかったのに、その墓は神に逆らう者と共にされ、富める者



と共に葬られた。

「富める者」はいい意味で使われてません。驕り高ぶる者という、多分そういう意味合いだと思います。

<sup>10</sup>病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ、彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは彼の手によって成し遂げられる。<sup>11</sup>彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った。<sup>12</sup>それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびただしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。」(イザヤ53:1-12)

と。これは誰のことを言っているのか、ずっとわからないんです。預言者もわからない。とにかく、こんなことを預言させられた。しかも、紀元前70年とか80年とか、そんな時にです。

### ●我々を救いあげるために

使徒行伝を読みますと、エチオピアの宦官かんがんがイザヤ書を読んでいるとき、ピリポという使徒が通りかかったら、ピリポに

「誰のことを言っているのか教えてほしい」

と聞いたという問答があります。それがイザヤ書のちよどこころのところだったという。キリストはこれを自分の預言として受けとられた。どう受けとろうと、それはご勝手なんですけれども、キリスト・イエスはこれを自分についての預言として受けとられた。そして、この通りのことをなされたでしょ。あの十字架の場面でも全然、逆らっていらつしやらない。恥辱に身をまかせて、あのゴルゴタの丘を登るときには正にこの姿です。屠り場に引かれる小羊のように口を開かない。捕らえられ裁きを受けて命をとられた。その通りに。しかも、その当時の人々は、キリストをなぜ十字架につけたかという、神に背く者、己を神と等しい者にしたとか、神をないがしろにしたという、その罪なんですよ。もちろん、殺人罪ではありません。宗教的な罪なんです、彼は己を神と等しくしたという。キリストに神さまが100%に宿って、御言を伝える。

「これは私の言葉ではない。神さま、父がしゃべれと仰ることをしゃべっているだけ。せよと仰ることをしているだけ。私は何ものでもない」

とキリストは言っているのに、

「あれは己を神と等しくした。安息日を破った」

と、それで十字架につけて殺したわけですよ。民衆もそれに賛同してしまった。実に不思議



なことが起こっている。この言葉を全部、自らへの預言として受けとって、この通りなことをキリストはされた。

「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し、わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。<sup>4</sup> 彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた。神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。」(イザヤ53:3-4)

ところが実は、我々を救いあげるためであったという。私たちのどうしようもない背きという、煮ても焼いてもどうにもならないこの自我という罪、己を立てるといふ、これが罪の根源なんです。

「こんな悪いことをしました、こんな悪い考えを抱きました」というのは枝葉のはなしであつて、根源的に自分の存在そのものが神さまに逆らつていふという姿、これが「原罪」というんです。これはなかなか気がつかない。

「何で私が悪いのか。何も私は悪いことしてないではないか」といふ、「悪い思いを抱いていません。悪いことをしてません」といふレベルなんですけれども。存在そのものが神さまに逆らうような質、これはカトリックの方では「原罪」とかいますけれども——呼び名は何でもいい——本質的に人間というのは己を立てる。神さまに栄光を帰さない。己に栄光を帰する。自分をサムシングにしたい。「ちよつとは褒めてよね」といふのが人間の思いです。

ところが、イエスという方は全部、神さまに献げつぱなしです。私は思いますのに、彼らに捨てられたでしょ。人間に彼は捨てられた。

「<sup>3</sup>彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている」と3節にあります。人から捨てられるだけなら、まだ我慢できると思う。自分が正しいと信ずる道に殉ずるならば、人から捨てられるのは構わない。究極のところは、自分が正しいければ。ところが、神さまからも捨てられる。行きようがないですよ。

「神さまだけは私を知ってくれている。人々は間違っている。自分は迎合的ではないからボコボコにやられても構わない。私は正しいんだ。神さまはわかってくれている」

と。ところが、神さま自身が捨てるんですよ。これはひどいですよ。皆さんはそう思われませんか？ 神さまが捨てるというのは。今まで離れたことはなかったんです、イエスという方は。

「父と私は一つである」

と。離れたことはなかったでしょ。それを引き裂かれて、



「地獄へ落ちろー!」

「何でなんですか!?!」

と。ゲツセマネで、

「額から流れる汗は血の滴のごとし」

と書いてあります。天使が現れて、「がんばれよ、がんばれよ」と、背中をさすつていたという。今まで思いも及ばないことですよ。

「父と我とは一つなり」

と言った方が、引き裂かれて地獄へ突き落とされた。これは耐えられないと私は思います。これには私は頭を垂れるしかない。そして、十字架の上で、

「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは自分のやっていることがわからんでいるから、どうぞ、赦してやってください」

でしょ。お釈迦さんも、あの大慈大悲は素晴らしいですよ。でも、お釈迦さんは苦しんだといても、自我の悩みで苦しんで、悟りをひらいて、

「さあ、寄つておいで」

と。これは春の世界ですよ。

「燦々と太陽が照っているから、いらつしやい」

と。それで本当に救われるのなら、もうこんな素晴らしいことはないけれども、このイエスという方が歩まれた道というのは正に残酷な道です。正義とか義とかいうものに相いれない道ですよ。ところが、イエスはそれを自分で受け入れた。

「人が私から生命を奪うのではない。私は自ら捨てるんだ」

と、ヨハネ伝に書いてあります。だから、本当の意味で、ヨハネ伝だとかそういうものを読みますと、泣けてきます。日本人でありながら、泣けてきます。

### ●人間の本質的な姿

「だいたい、民族を意識して、

「あれはユダヤのものだ。ヨーロッパの宗教だ」

とか、そんなケチな根性は、皆さん、捨ててください。地球はたった一つでしょ。地球は一つ、太陽は一つ。これによって万物は何十億年も生かされてきた。人類の歴史は何万年か知りませんが、一つの太陽によって生かされてきた。そのように、本当の根源的な生命のお方が生命を与えてきたはずなんです。それを、

「ユダヤから出たからユダヤ人は嫌いだ」

とか、

「いや、どこがいやかというと、あの宗教はヨーロッパだから」



とか、そんなケチ臭い思いを捨ててください。人間みな同じです。根源的には。その同じ——毛色は違おうと、人種は違おうと——人としては同じなんです。みなハートを持っている。魂を持っている。霊がある。その人間に霊の根源である——宇宙の「大霊」と言ってもいい、何とでも名前は付けたらいい——そのお方と一緒にいた根源的な霊のお方が、

「はじめ太初に言あり。神と共にあり」

という、根源的な霊なるお方が時至って遣つかわされてきたんです。

「おまえ、地球へ行つてこい。今まで預言者は何人もいた。でも、効き目がなかった。

おまえが行け。最後の切り札だ」

と。ところが、最後の切り札をボコボコにやつつけた。これが福音書の姿でしょ。

「これさえ殺せば、もうあとは私たちのものだ」

と、書いてありますもの。そのお方が、

「父よ、彼らを赦してやってください。彼らはわからないでやっていることですから」

と、最後まで執り成しているんですね。これには参ってしまいますよ、本当に。

「あれはユダヤの話だ。あれはヨーロッパの宗教だ」

とか、そんな次元に皆さんは囚われなくてほしい。本当に人間の本質的なもの、根源的な姿がそこに描き出されている。神さまなんて、自分たちの思弁で捕まえられるようなものは大した神さまではない。わからない。本当にわからない。わからない天の次元を携えて、

「私を見た者は父を見た」

と、そう言ってくれたのがイエスでしょ。そのイエスは、

「自分は何ものでもない。しゃべれと仰つたことをしゃべっている。せよと仰つたことをやっている。それだけだ。私は何ものでない。ナッシングだ」

と、キリストは言っている。そういうところに本当に気づいてほしいんです。これは普遍的真理です。

●天への道を開いてくれた方

そして、その方は、我々罪びとを——「罪びと」というのは「神に逆らう人間」ということです。神さまより己の方を大事にする。一つしかパンがなければ自分が食べる。二つだったら、一つは神さまに一つは自分にといいけれども。一つしかなければ、私がまず食べて、神さまには「ありません」と言う——こういう自己中心な人間の自己愛を全部消し去って、十字架の上に全部引き受けて消し去って、そして、天への道を開いてくれた。

「誰でも無条件で入ってきなさい」

というのが、十字架で開いてくれた天への門、天門でしょ、無条件に誰にでも。無条件とい



うのが凄い。「本気で入ってくるならば」という。それが、みんな入って行かないでしょ、いくら開かれていても。背を向けていたらだめです、クルッとこつちへ向かないと。

夜というのは何でしょうか。地球が太陽に背を向けているんです。地球はグルグル回っていますから。太陽は動かない。地球が太陽の回りをグルグル回っている。しかも、回りつつ、また自分も回っている。そして、太陽に背を向けているときに夜であり、また太陽の方に向いてきたら朝になり昼になる。闇というものは積極的に存在しない。太陽の光が届かない状態を自分でつくりだして、それを夜とよび、闇とよぶ。

そして、それは比喩的に言うならば、人間の生命と死です。だから、神さまは光であり生命であり、人間を生かそう生かそうとしている。それでなかったら、神さまは刑罰でボコボコにして殺すなんていう、そんな神さまだったら、ごめんこうむりますよ。そうでしょ。そうではなくて、神さまは

「人間を生かしたい、生命を与えたい」

と。ところが、人間は自分で背を向けて、

「光よりも闇を愛した」

という。何でか。

「自分の行いが悪いから、光に照らされるのがいやだから、背を向けた」

とヨハネ伝に書いてあります。だから、聖書というのには本当に人間の姿を表してくれている。旧約聖書はユダヤ人を通して語られた神さまの言葉で、非常にユダヤ人の民族性が強いから、いろんな妨げや躓きがある。そんなのは全部とり払えばいい。砂金から金を採るように、旧約聖書というのにはぶ厚いですが、その中から普遍的なものを、真理を取り出してきて、それを我々のものにすればいい。民族的な色彩の強いものとか、非常にユダヤ的なものとか、そういうものはカットして、本ものだけを受けとればいい。新約聖書になると、それが本当に光り輝いています。キリスト自身も、旧約聖書の中からずいぶんいろんなものを取ってこられた。

「旧約ではこう言われている。しかし、私はこう言う」

と、常に旧約と新約とは違っていますよ。真理の世界というのはそういうものだと思う。真理というのは本当に生命を与えるものです。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と言われました。

「あなた方は真理を知る。真理はあなた方を自由にする」

と。ということ、私(キリスト)というのは真理のかたまり、権化ごんげなんです。しかも、

「自分は何ものでもない」

と言う。そのお方から流れてくるものを受けとれば、なにか自分は解き放たれて、光の世界



へ入っていく。光に満たされていくという、そこへ招いておられる。

「さあ、いらつしやい、いらつしやい!」

と——寄席<sup>よせ</sup>ではありませんけれども——そういう世界なんです。

●日本は最後の終着点

さつき<sup>さつき</sup>のイザヤ書55章に、

「渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい」

とありました。価なく無条件にいらつしやいと。

「銀を持たない者も来るがよい。……」

なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い、

飢えを満たさぬもののために労するのか」

と。神さまのことを知らなければ、そういうことです。せつせと、何とかして満足を得たいからいろんなことをやろうという。でも、それで魂は満たされない。究極なる方はこのお方だよ。最後の切り札として送り込んできたのがイエスという方だった。そのイエスをボコボコに殴って殺してしまったのだから、ユダヤ人はやはりしばらくはその罪を背負って、世界中をさま迷わなくてはならない。

「悪かった」

と言って早く帰ってくればいい。でも、ユダヤ人は言わない。

「イエスは預言者にすぎなかった」

と、未だに認めていないそうです。しょうがないですね。

だから、ユダヤ人に対してのいろんな神さまの啓示が今度は異邦人の方に向けられた。そして最後に日本にやってきた。我々は最後の終着点かも知りませんが、世界をグルーツと回って。その前に日本は法然や親鸞やいろんな仏僧が出てます。鎌倉仏教以来この霊の世界が耕されている。最後に非常に耕されたところに素晴らしい神の種が宿ろうとしている。それを「いやです!」

と言って、戦後みんな拒んでしまった。

「宗教教育はいけません!」

と言って、全部、蓋<sup>ふた</sup>をした。60年間、蓋をし続けたら、今度はそれをひっくり返すのはなかなか大変ですよ。道路工事は、埋めてはまたひっくり返してやりますけれども、人間の魂に固く閉ざされたこの蓋というのは、そう簡単にはいかない。60年間閉ざしてきたんですから。



## ●旧約における福音

次にミカ書6章6節から、

「<sup>6</sup>何をもって、わたしは主の御前みまえに出で、いと高き神にぬかずくべきか。焼き尽くす献げ物として、当歳の子牛をもつて御前みまえに出るべきか。<sup>7</sup>主は喜ばれるだろうか、幾千の雄羊、幾万の油の流れを、わが咎とがを償うために長子ちやうしを、自分の罪のために胎の実をささげるべきか。

人身御供ひとみごころというのが昔の宗教にはありましたから、こういうことが書いてある。ところが、そうではないと。

<sup>8</sup>人よ、何が善であり、主が何をおまえに求めておられるかは、おまえに告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」(ミカ6・6〜8)

これが本当に求めておられることだと。紀元前の何百年か前に預言者に与えられた言葉です。それから、詩篇103篇。これは旧約における福音だと言われている所です。2節から、

「<sup>2</sup>わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計おんらいを何ひとつ忘れてはならない。<sup>3</sup>主はおまえの罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、<sup>4</sup>命を墓から贖い出してください。慈しみと憐れみの冠を授け、<sup>5</sup>長らえる限り良いものに満ち足らせ、驚のような若さを新たにしてください。<sup>6</sup>主はすべて虐げしいたられている人のために

恵みの御業みわざと裁きを行われる。<sup>7</sup>主は御自分の道をモーセに、御業をイスラエルの子らに示された。<sup>8</sup>主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。<sup>9</sup>永久に責めることはなく、とこしえに怒り続けられることはない。<sup>10</sup>主はわたしたちを罪に应じてあしらわれることなく、わたしたちの悪に従って報いられることもない。<sup>11</sup>天が地を超えて高いように、慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。<sup>12</sup>東が西から遠い程、わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。<sup>13</sup>父がその子を憐れむように、主は主を畏れる人を憐れんでくださる。」

(詩篇102・2〜13)

まず、永遠の生命をくださるという。命を墓から贖い出し、長らえる限り良きものを与えてくださる。そういうことを約束し、憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。罪の嵩かさに従って報われないう。はるかに恵み深いということを言っています。

「天が地を超えて高いように慈しみは主を畏れる人を超えて大きい。東が西から遠い程、わたしたちの背きの罪を遠ざけてくださる。父がその子を憐れむように主は主を畏れる人を憐れんでくださる」

という。ここは旧約における福音といわれる箇所なんです。旧約聖書というのは、日本人は



嫌う。ユダヤ民族に与えられたもので、血なまぐさい歴史に貫かれているとあって、嫌がるんです。血なまぐさいと言ったら、日本の歴史だって血なまぐさいでしょうが。

### ●幸いなるかな

まだプリントのほんの入口しか話していないんですけども、一かけらでも味わっていただけなら、それでいい。今度は、新約聖書からの引用のところへ移ります。

聖書のマタイ福音書5章1節から12節、見出しに「幸いなるかな」とありますが、この題名は全部、私が付けたものです。たとえば、さきほどの詩篇103篇も「人の思いを超えた神の慈しみ」という題を付けました。そんなふうになんかそれぞれ私が題名を付けました。

この5章のところは、いわゆる「山上の垂訓」とか言われている。「垂訓」というと教えを垂れるということで非常にいかめしい感じですが、この新共同訳では「山上の説教」となっています。これもまだ抹香臭いですね。

私が導きを受けた小池辰雄という先生は、「山上の大告白」と言われた。

「教えではない。キリストは自分の内面を告白しているだけだ。キリストはそんな教えたりする人ではない。もつと自然人だ」

と。本当にそうだと思います。それは弟子どもに対して教えられた部分もあるでしょうけれども、だいたいは自分の見てきたことや、自分が今どういう思いかを告白されている。なにせ、天からくだってきた人でしょ。

「天の次元はこうなんだ。地上では憎み合ったりしているが、天上の世界ではそうではない」

と。では、どうしたら、天上の世界に我々は地上で生きられるのかと。それにはひとつの鍵がある。それは何か。

「それは隠されている。私を受けとりなさい。私がおまえと一つになったら、あなたは私の言っていることがみんなわかる。みんなできるようになる」

と。これが天国なんです、本当は。天国というのはなにか「青い鳥」みたいに、あちらこちらに探しに行くのではなくて、そこにあつたという。青い鳥はそばにいたんでしょ。天国はあなたの心の中に宿る、キリストというお方があなたの中に宿れば。でも、肉体の人間のままだでは宿れません。だから、天界に行かれたキリストは今度は、聖霊という姿で私たちの中に宿ってください。それが歴史的に起こったのがペンテコステといわれている聖霊降臨です。

イエスは復活後四十日間、弟子たちと一緒にいられて、天に昇られるとき、

「祈っていないさい。そうしたら、私は降<sup>くだ</sup>ってくるから」

と言われた。そして、聖霊降臨という事態がありました。それからです。もう本当に弟子たちは霊なるイエスというお方と一つになって伝道が始まった。これが昔の「使徒行伝」、今



では「使徒言行録」の事態なんです。

キリストが地上でいろんなことを仰っていますけれども、それが本当に受けとれるためには、自分たちの中味が変貌、変質しないとイケない。「肉」と「霊」といいますが、肉なる姿というのは生まれながらの姿なんです。我々の生まれながらの姿は肉なる姿といいますが、これは別名は、自己中心です。自我中心。それに対して、霊なる姿というのは神中心です。イエスという方は肉体をとってこられたけれども、その中であつていつも、「かぐや姫」みたいに天を仰いで、父なる神さまを、

「お父ちゃん、お父ちゃん」

と呼んでいたわけですよ。とにかく、イエスは地上におりながら天を慕っておられた。自分の故里ふるさとですから。そして、故里へやがて帰って行かれる。でも、帰り方が気の毒なんです、さつきから言いましたように、十字架なんです。かぐや姫はスーッと行きましたよ。

「月から来たので月に帰らなければなりません。お爺さん、お婆さん、さよなら」

と言って、天に昇っていく。いろんなやつがみんな守つたけれども、光がきて、目が眩くらんで、かぐや姫は天に昇って行ったという、あの「竹取物語」は実にうるわしい物語ですけども、キリストはそうじゃない。十字架というものがありません。

### ●キリストの十字架

「なんでやねん、この十字架は!？」

と。それがさつきのイザヤ書53章に出てました。人間の背き、自我を——煮ても焼いても食えない自我——それを全部、引き受けた。それは重いですよ。何十億人の罪を全部背負いきるんですから。過去・現在・未来、全部なんですよ。こんなことは神の子にしかできない。どんなに偉い宗教家であつてもこれはできない。

お釈迦さんは幸せな人です。涅槃ねはんの境地に入つて、

「さあ、みんな寄つておいで。小鳥もみんな寄つておいで。みんな幸せな世界へ行こう」

と。あれで全部が救われるなら、本当にこれは「めでたしめでたし」ですけども、ユダヤのイスラエルに示された道はそうじゃなかった。十字架の道ですから。どっちが好きかと言われたら、多分皆さんは、お釈迦さんが好きだと仰るでしょう。でも、好き嫌いで決まらないですね、本当のところ。好き嫌いではどうにもならん。

やはり、人間というのは自我という、神に反逆するところがある。アダムとイブの昔からずうつと積み重なってきた、遺伝で積み重なってきた。これはそんな簡単に消えないですよ。御おほら被はいはしたくらくらいで消えたら楽ですけども、そんなもので消えない。それを神さまはイエスという愛いとし子こを選んで、

「おまえがそれを片づけろ」



「どないしてやりまんねん？」

「十字架だよ。これしかない」

「わかりました！」

というのがゲッセマネの祈りです——こんな落語みたいに私はしゃべっていますけれども(笑)——キリストの姿というのは本当に悲惨ですよ。なにせ、今まで離れたことはなかったんです。皆さんは、神さまから離れて一か月やそこらは平気でしょ、多分。私たちは一か月くらいたつたら、

「何となくおかしいな、なんとなく空虚だな。あつそうだ、忘れてた！」

と言って、また帰ってくる。人間というのはそのくらい、いい加減ですけれども、この方は違います。いつも、

「父よ、父よ」

と呼んでいる。とにかく、神さまの懐で夜通しでも祈っているのが楽しくてしょうがない。僕らからしたら難行苦行です、

「夜通しで祈っておれ」

と言われたら。僕はやったことはありません。やった方を尊敬します。でも、僕はイエスという方が好きだから、無条件に私を受け入れてくださるから甘えている。その代わり、私は自己主張はしません。いつも、

「すべてはあなたから流れてきます。いいものは全部あなたから来ます。それを無条件にいただきます」

と言っているから、

「まあ、よつしや。それでいいわ」

と、きつと言ってくださっていると思う。この方は、すべては父一切で歩んだ。そうでしょ、

「私は何ものでもない。私を見た者は父を見た」

と。そのままです。空っぽだから神さまが充滿している。ところが弟子たちは見えなかった。

「父を示し給え。さらば足れり」

なんて言う。お別れに臨んで、「何か望みはないか？」と言ったら、ピリポが、

「別れるのはいやだけれども、せめて最後に、父を示してください。そうしたら納得します」

「こんなに長いこと一緒に居たのにまだわからないの!？」

と。「この馬鹿もの!」とは仰らなかつた。僕だつたら、

「まだわからないの。このバカツたれ!」

と言いますけれども(笑)。キリストはそうではなくて、

「私を見た者は父を見たんだよ」



と言われた。ヨハネ伝に出てくるでしょ。桁違いなんです。とにかく、天の御座みくらを捨てて、地上に姿を取ってくれた。

### ●サンダーシング

インドにサンダーシングという方がいた。彼の『聖なる導きインド永遠の書』(林陽訳、徳間書店1996年6月刊)という本がある。生まれたのは1889年。1904年12月18日に彼は回心して、大転換する。本当にキリストが現れてきてくれた。彼は小さい頃から宗教教育を受けて、自分のお母さんの宗教を受け継ぐ者として定められていた。ところが、空しくなつて、宣教師たちに逆らつて、宣教師の目の前で聖書を引き破つて焼いてしまった。さすがに気が咎とがめて、それで3日ほどたつたときに、何をしても自分の心に平安がない。英才教育を受けてきたけれどもだめ。

「神さま、本当にあなたがいらつしやるなら、教えてほしい。それを教えていただきかなければ、私は自分で自分の命を断ちます」

と決心して、午前3時から水を浴びて祈りだした。4時半になつても全然、答えが来ない。ところが、その直後に部屋の中がバーツと明るくなつて、そこに光のようなものが射ってきて、キリストの御姿が現れたという。彼はキリストを知りません。聖書を破っているくらいですから。ところが、キリストが現れてきた。彼は、仏陀とかクリシュナとか何かそういう霊なる存在が現れてくれると思っていたら、現れたのはキリストだった。それで、彼は一晩で生まれ変わるんです。それから迫害されます。毒を盛られて死にかかる。それから伝道に出かけます。

この本にはそのサンダーシングの生涯のことがちよつと始めに書かれていて、それからあとは——サンダーシングはしばしば岩の上に座禅を組んで祈る。4、5時間も祈ると、天界が開かれてキリストが現れて問答する——そんな記録がこの『聖なる導きインド永遠の書』(林陽訳、徳間書店1996年6月刊)という本です。そういう人なんです。

とにかく、我々には天界のことはわからない。そのわからない天界のことをわかる姿で何とか伝えようとして、イエスという方が現れてくれたけれども、人間の思いと神の思いとはあまりにもかけ離れています。だから、水と油でした。水と油はあい容れない。あんな善きことばかりをなさつたキリスト。そうでしょ。福音書の中でこんなに慈しみ深い、恵み深いお方はいらつしやらない。宗教的な人間の間違ひは正されましたよ。特にパリサイ人とか、そういう当時の宗教に対しては厳しく「間違っている」と言われた。それで憎まれて、十字架でしょ。でも、苦しんでいる人とか、病に悩んでいる人とか、それから、宗教家からさげすまれている者とか、そういう者に対して本当に慈いつくしみ深いですよ。だから、そういう人は寄ってくるわけでしょ。そういうキリストでした。



## ● 山上の大告白

マタイ伝は非常にキリストの言葉がたくさん集められている。これは「キリスト語録」というキリストの言葉ばかりを集めた資料があったそうで、それがマタイ伝ではふんだんに展開されている。

ルカ福音書の方は、キリストの伝道の順序に従って、マタイ伝で一括に集まっているものを、ところどころをその時々に合わせて編集し直されています。それがルカ福音書です。マタイ伝はマタイ伝のひとつの意図をもってそういうふうにはイエス語録を集めた。それからイエスのなさったことがずっと出てくる。それぞれ聖書を編纂した方の意図というものがあります。

マルコ伝は一番素朴なんです。とにかく、ペテロが自分の弟子のマルコ・ヨハネに口述筆記させたというふうに言われている。だから、マルコ伝は一番単純です。その前に置かれているのがマタイでしょ。それからルカ。このルカというのは非常に異邦人向けに書かれていますから、他の福音書にないものがふんだんに使われています。「放蕩息子の譬話」とか、「善きサマリア人の譬話」とか、他の福音書に見られないいろいろな特色を持っているのがルカ福音書です。非常に人間性豊かということが言えると思う。

それから、一段とまた次元の高いというか、深いというか、それがヨハネです。これも歴史的な順序で書いてない。ドラマチックに天の世界を、天の次元をヨハネを通して語っている。ヨハネ伝では、「その次の日」と書いてあっても、その起点がわかりませんから、「昔、昔ある所に」というのと同じように、「その翌日」といつても、いつを起点に言っているのがわからない。ヨハネ伝はそんな書き方です。でも、非常に深い。

有名なのはこの「山上の垂訓」と言われたマタイ福音書のこの箇所です。これを小池辰雄という私の先生は、「山上の大告白」と言われた。つまり、キリストはご自分の内面をここで告白しているだけで、説教がましいことを言うようなお方ではないと言いました。自分の内側をオープンにして、

「ご紹介するならば、この通りだよ」

という。ところが、次元があまりにも高いから、みなついて行けなかった。内容がこの世の価値観と全く逆なんです。

「<sup>3</sup>心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」(マタ  
イ5・3)

と。「貧しい」というのは、さもしいのではない。心が、霊が——これは心ではなくて霊です——霊が神さまの前に空っぽ、オープンマインド。これはキリストの姿です。神さまの前に空っぽでしょ。だから、神さまが充滿したでしょ。自分の告白なんです。

「私は神さまの前に空っぽだ。そうしたら、天国が私の中に充滿している。こんな



素晴らしいことはない」

と、それだけなんです。でも、人間は貧しくなれない。みんな己をサムシング(何ものか)だと思っっている。だから、人に軽蔑されたり侮辱されたら、怒ります。まあ金を盗られても怒るけれども、侮辱されたらもつと怒る。

「プライドを傷つけたな!」

とか。私の子どもの頃は、不良から「面切つたな!」なんて言われた。ちらつと見たら、

「おい、おまえ、面切つたな!」

と言われて、逃げ出すわけです(笑)。つまり、おのれのプライド、名誉毀損、いろいろあります。それはそれでいい。

けれども、このお方は神さまの前に空っぽなんです。というのは、神さまほど素晴らしい方はないと信じているからです。あるいは、昔、神さまと一緒に暮らしていたのが、故あつて地上に現れてきたんですよ。マリアさんのお腹に宿つて現れて来た。でもやはり、天国は恋しいし、本質的には向こうから来たお方だから、神さまの質が浸透しています。それと人間的な要素、この二つがからんでいます。これがイエスですよ。もし単に天国的要素だけだったら、我々とは断絶があります。悲しみがわからない。みんな、

「何で? 不思議だね」

と、これで終りなんです。ところが、マリアさんから生まれて、人としての悲しみも痛みも、センシビリティ(sensitivity、感受性)が人一倍深い。だから、人一倍深いその本当のセンシビリティと、それから神さまのものを100%に受ける。向こうから流れてくる。この二つが一つになつているお方がイエスというお方です。そういう角度で福音書を読まない、それは読めないです。

### ●私はナッシングだ

そして、皆さんはすぐ奇蹟に躓く。神さまのところからやって来て、神さまの霊が充滿している方がいろんなことをなさる。これは全然、不思議ではない。しかも、「やった、やった」と言つて何も誇つていない。イエスという方は、

「自分は何もできない。父が私の中で御業を行つている。私の言葉は、父が語

れと言われることをそのまま取り次いでいる。それだけのことだ。自分は空

っぽだ」

と言っている。いろんな宗教家はそんなことは言わない。「私は真理を体得した。さあ聞け」なんてな調子で言うかも知れませんが、この方は、「私はナッシングだ」と。それが「霊が貧しい」姿です。神さまの前に己を立てない。神さまの前に完全に明渡して、オープンマインドだ。そうしたら、神さまが100%に宿る。だから、



「私を見た者は父を見た。見えない神さまを、私を通して見てごらん、霊の目で見てごらん。身長何センチ、体重何キロなんて、そんなんじゃない。肉体の私の背後にいる霊なるお方、これを見てくれ」

と言う。それが地上の人間には見えなかった。自分の尺度で判断するから。今だってそうでしょう。福音書にいろんな奇蹟の業が書かれているのを、大抵、神学者は全部、否定する。

「そんなバカなことはない。あんな非科学的な、非合理的なことはない」  
でも、神さまの側から見たら、

「何でそんなことを問題にするのか。それは本質的にはどつちでもいいじゃないか。そういつたことを通して何が語られているか、これを受けとってほしい。これを知って欲しい」

と。「徴しるし」というのはいさういさうことなんです。「パンの徴」とか言います。

「五つのパンを五千人の人が食べても、なお十二の籠かごに満ちあふれた」

とか、「七つの籠にあふれた」とか書かれています。それは永遠の生命——あのパンではなくて——キリスト・イエスという方は永遠の生命です。

「私は生命のパンである。私を食べる者は死なない。永遠の生命にあずかる」

と言われた。それを知ってちょうだいねと。ところが、人々はこの人を捕まえておいたら、パン問題は解決すると思った。彼を捕まえて王様にしようとした。それで、イエスは逃げ行かれた。

「神さまが与えようと思っっている永遠の生命、愛の生命を、憎しみから解放された

世界、太陽のごとき光輝き愛に満ちたその世界を受けとってほしい」

と言って来られたのに、人々は「ああ、パン問題はこれで解決する」というので王様にしようとした。だから、イエスは逃げて行かれたと書いてある。

●おまえは十字架にかかって人の罪を背負え

一事が万事、そのぐらい神の思いと人の思いは、天と地が隔へだたるくらい、東と西が遠いほどに隔たっている。それに気づけばいいんです。

「ああ、そうだったの。それでは、もう地の、肉の思いを——生まれながらの人間の思いを肉という——これを捨て去って、ひたすらあなたに向かいます」

という、「悔い改め」というのがそれなんです。方向転換です。翻ひるがえるということ。自分を責めたってしょうがない。そうではなくて、

「私は今まで背を向けていましたけれども、あなたに向かいます。そうしたら、光が射し込んできます。今まで閉ざしていたものが、いつのまにか開かれました」  
と。すると、イエスは、



「そうだよ。十字架で全部、開いたよ。おまえさんの自我という、プライドとか、いろんなものがあつた。それが邪魔して神さまの愛が届かなかつた。けれども、全部、十字架で引き受けた。全部、十字架で背負ったから。ああ、重かつたよ」

と。それは重いと思いますよ。過去の全人類の罪、自我、それから未来にまだまだ続いていくでしょ。それも全部、過去・現在・未来、全部の人間の罪、我を——自我です、神に逆らう思いです。これが「罪」なんです。神に逆らう思い、己を主張するのが「罪」です——それを十字架で引き受けた。これは重いですよ。しかも、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまひし」

と言われた。さっきのイザヤ書のところに、

「彼は人に侮られ、捨てられた」

とあつた。人に捨てられるのはまだいいですよ。でも、神さまに捨てられるというのは、これはひどいではありませんか。あんなにいつも一つで、愛され愛し、本当に一つであつた、このイエスという方が引き裂かれて、蹴飛ばされて、地獄のどん底まで落とされた。これが十字架なんです。皆さん、「十字架、十字架」と言いますけれども、

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまひし」

というのはその叫びなんです。

「こんなにあなたと一つだったのに、お捨てになるんですね、本当に」

という、イエスにとって未だかつて味わったこともなかった体験です。それをあらかじめ示されたのがゲッセマネの祈りなんです。ゲッセマネで弟子たちは寝てたでしょ。祈りは耳に聞こえていたけれども、寝てた。天使が現れて励ましたという。

「額から落ちる汗は血の滴の如くであつた」

と、ルカ伝に出てきます。今まで一つであつた方が引き裂かれようとする。しかも、

「何のためですか?」

と言うと、

「おまえのせいではないんだよ、気の毒だけれども」

とは一言も仰らない。

「とにかく、おまえは十字架にかかつて人の罪を背負え」

と言う。それが十字架ですから。これはお釈迦さんこたわも知らない世界です。どの宗教家も知らない世界です。イエスというお方だけが味われた道です。

だから、私は申し上げたい。いろんな宗教の隔たりに拘こたわらないでください。それぞれの宗教にはそれぞれの意味があつたでしょう。それはそれで結構です。でも、ちょうど太陽が一つであつて、一つの太陽によつて地球は生かされているように、究極のところからくる生命の光、生命の源、そこから流れてくる生命を受けてみんな生きる。それぞれの宗教はそれな



りの役割がある。氏神様には氏神様の役割があります。鎮守の森でその地域を守る。お地蔵さんはお地蔵さんでその役割があるでしょう。

でも、それらのいろんな役割を突き抜けて、本当の霊なる人間は、人は肉体的な人間であると同時に霊なるものです。「ひと」というのは「霊止」、霊が止まると書く。『大言海』という辞典をご覧になるとわかります。

「神の霊が止まっている存在を霊止という」

と、大言海に書いてあります。そういう、神さまの霊を受けていた、それに満たされていた方が、天と地の間に引き裂かれる姿で十字架にかかつて、

「父よ、彼らを赦したまえ。そのしていることがわからないからです」

と、そう言って執り成したんです、十字架の上で。そして最後は、

「私の霊を御手に委ねます」

と言って、息を引きとられた。

「神殿の幕が真つ二つに裂けた」

と書いてあります。というのは、今まで旧約の世界で閉ざされていた天が開かれたということでしょう、象徴的に。そのお方がこうやって、

「霊の貧しいひとは幸いだ。神さまの前に自己主張をしない、あなた(神さま)だけです」と言っているその姿が一番素晴らしいんだよ

ということをおられるわけです。

●幸いだ、私がおあなたを慰めるから

「<sup>4</sup>悲しむ人々は、幸いである。その人たちは慰められる。」

これは第三人称で書いてましょ。淡々と客観的に、こういう人はそうだと。次に自分をあてはめて、

「私はそうなのか、そうならいいな」

と。裁判というのはそうなんです。三段論法というのがありました。大前提、小前提とか何とかと言うけれども。聖書の言葉を読むときには、それではだめです。

キリストが私に語りかけているという、そういう読み方をしてください。たとえば、「悲しんでいる人は」とあつたら、

「あなたには悲しんでいるね、悲しい。人から見たら悲しいだろう。しかし、本当はそうじゃない。幸いなんだよ。私がおあなたを慰めるから。私とあなたは一つなんだから」

という、すべて、「私(キリスト)が」というのが背後にあつて、そして、

「あなたを抱きしめるから。あなたと私は一つなんだ。そのために来たんだよ」

と。これが福音なんです。これを受けとれる人は幸いです。

ところが、傲慢な人とか、驕り高ぶっている人とか、満ち足りている人とか、権力の座にある人、賢すぎる人、これはそれを受けつけないんです、残念ながら。あまりにも健康に恵まれていて人とか、あまりにも幸せな人、これは受けつけない。ところが、ズタズタにボコボコにされた人はそういうものにすがりつきたい。だから結局、その人たちは幸いです、本ものに出会うことができたから。

星野富弘さんという方は、中学校の体育の教師で、鉄棒の指導をなさっていて、自分が鉄棒から落ちて、首から下がだめになった。何度も死のうと思われた。ところが、導かれて、キリストを知って、それから口に絵筆をくわえて絵を描くようになった。そして、素晴らしい絵を次から次へと描いているでしょ。世界中にあの絵が送られているそうです。もしもあの人が首から下がだめにならなかつたら、中学の体育の先生で終わっていたかもしれない。ところが、自殺をしたと思うほどのどん底に突き落とされて、天界が開けて、そして、天の輝きをもって絵を描いているから、人の心を打つ。しかも、あの人は悲しみのどん底を味わっているからです。

ですから、本当にキリストの言葉というのは、この世的に見捨てられた人とか、この世的にボコボコにやられてしまった人、自己嫌悪に陥った人、裏切られた人、とにかくマイナス要因をかかえている人たちのところにやって来るんです。そして、

「私があなただを慰める。私があなただを本当に生かす。マイナスと見えたものは実はプラスへの転換点だったんだよ」

と。十字架という最も無惨な死が生命への道なんです。

キリストがあのまま死にっぱなしならば、もう私も存在してないし、もう真つ暗です。でも、あの方は永遠の生命の姿で現れてきてくれたでしょ。そして、いろんな人に今も現れてきてくれるんですね、サンダーシングにも現れてきたし。

### ●鍵は一つ

そういうことで、もう時間がきてしまったけれども——これは目茶苦茶ですね(笑)——たくさん資料を用意したのに、百分の一もしゃべっていない。

でも、鍵は一つです。本当に自分から解き放たれた人、この世のことだけで生きてきたのではなくて、霊界が、天界が開けて、神さまの光が射し込んでくる人。その光はキリストの光です。キリストは今も生きておられますから。本当に求める者に姿を現してくださいますから。その人に出会ってほしいんです。

私はそれで生きてこれたんです。24歳ではまだまだわからなかった。歳を重ねるごとに深まってきました。はい、本当の本当だと思えるようになりました。なんとかして、この世界を知ってほしい。それが私の心からの願いなんです。



ここに来ていらつしやる方の多くの方々とは、私は個人的にも繋がりがあります。やはり、個人的つながりというののは大事です。こういった真理の世界というのは、宣伝だけではだめなんです。周知だけではだめです。やはり、人から人へ、心から心へ、魂から魂へと、それを通して伝わっていくということがよくわかります。

だから、皆さんが本ものを味わられたら、今度は皆さんが神さまに用いられる番ですから。自分の中にしまいこんではだめです。オープンにしてたくさんの方に分かち与えていく。これで神の国は広がっていくんです。

私は何の組織にも属しません。本当に一匹狼みたいな存在です。小池辰雄という素晴らしのお方に出会ったおかげで、そういう道を歩んだけれども、その私の導かれた道はまことに御意にかなう道だったと思っています。この世的にも用いていただき、いろんなポストにもつけていただいた。

でも、私を導いてきてくれたのはキリストなんです。私はキリストによって生まれ変わりました。24歳で。それからもう今は77歳になっていますから、たいへんな年月です。だんだん、キリストの素晴らしさがよけいわかってきた。だから、なんとかしてこのお方を知っていたらいい。そのために私が裁判所に勤めるなら、役に立つなら勤めなさい。どこどこに居るのが役立つのなら、そこに行きなさいと。派遣社員ですわ、私は(笑)。いろんな所へ行く。皆さんと一緒に皇居の回りを走ってみたりとか、いろんなことをやっていますけれども、それは私のうちにあるこれを知ってほしいから。

「あの人は何であんなに元気なんだろう。なんで、あんなにいつもニコニコしていらんのだろう?」

と。それはキリストというお方が私の中に宿ってしまったからです。キリストは、

「私を見た者は父を見た」

と言われたけれども、私も、

「本当に私の本当のところを見たら、人は私の中にいらつしやるキリストにきつと出会っていらつしやるはずですよ」

と、そう言いたい。生まの人間奥田からはそれは出てこない。私はふさぎ込んでいて、いつも自分を責めていた。本当なんですよ。ところが、このキリストの光が射し込んでくる。はもう変わったんです。24歳で変わった。それから歩いてきました。光に導かれて、いろんなところに頭をぶつけながら、疑ったり、悩んだり、いろんなことをしながら。でも、本当の光の道でした。だから、その光の道に皆さんも来ていただきたいという、その思いをこめて、日曜日は日曜日です。一年に一回こういうところでもこんなお話をしているんです。



## ●自分で味わってください

ここに作りました資料はほんの一部ですけれども——始めの頁に見出しが付いています  
が、この角度から——これを皆さん、ご自分で味わってください。これはそれぞれが素晴ら  
しいんですよ。一貫して流れているものは、

「己を高くする者はだめだ、己を主張する者はだめだ」  
ということ。

「一番偉い者は誰か。人に仕える者が一番偉いよ」

ということをキリストは言われたですね。

「神への愛と人への愛は一つだよ」

ということも言われています。

「愛する者の中に神は宿る」

ということも言われている。

「人は神の神殿だよ」

ということも書かれている。

「聖霊というお方によって初めて人間は新しく生まれ変わる」

と。ウワツ、すべてが素晴らしいんですよ。もう、時間がなくて残念！ また今度、徹夜  
でも皆さんとお話する機会を与えてくださいね。もう時間がきたので、これで終らざるを  
えません。では、このあとお祈りします。お祈りというのは神さまへの語りかけです。感謝  
のお札なんです。

## ●祈り

主イエス・キリストさま。もう、時間がきてしまいました。けれども、ここにお集つどいになつ  
た皆さんお一人おひとり、実はあなたが招いてここに引き寄せてくださったのだと、私は  
信じております。

どうぞ、私で語り足りなかったことをこの今日の資料を通して、またご自分でじかに聖書  
をお開きになって、

「ああ、あなたはこんなに恵みふかく、憐れみ深く、根底から私を愛してくださいっ  
たのだ、生まれでる前から私のことを大事に思ってくださいったのだ」

と、そのことに、どうぞ、気づいて、  
「目が開けました。新しく生まれ変わりました」

と、そういう喜びをもってこれからの日々を過ごしてくださいるように。

また、ここに集われた方の多くの方々はこの世にあって大事な仕事に携わっている方々で  
す。その方々に賜った才能を、世のため人のために、またあなたのお喜びになるようにと用



いていただいて、本当に一人ひとりを通して神の国がこの地に成っていきますように。

また今、痛んでいる方、悲しんでいる方、病んでいる方、その中にも、その人のところにも、あなたがじかじかに馳せ参じてくださって、励ましを与え、命づけ、そしてあなたの喜びの中へと、愛の中へと導いてください。

今日ここに集いたくても来れなかった方がたくさんいらっしゃると思います。どうぞ、その方々にも、いかにもして今日おいでの方々がお伝えし、またあなたがじかじかにお与えくださいますように希い奉ります。

この会のために労してくださった東京キリスト召団新宿集会の方々のために心から感謝を申し上げます。このつくしませぬ祈り、感謝を主イエス・キリストの尊い御名をとおして御前にお献げいたします。アーメン。

(小冊子『「神の思い」と「人の思い」—真に豊かな人生への道』2010年8月18日発行より転載)

